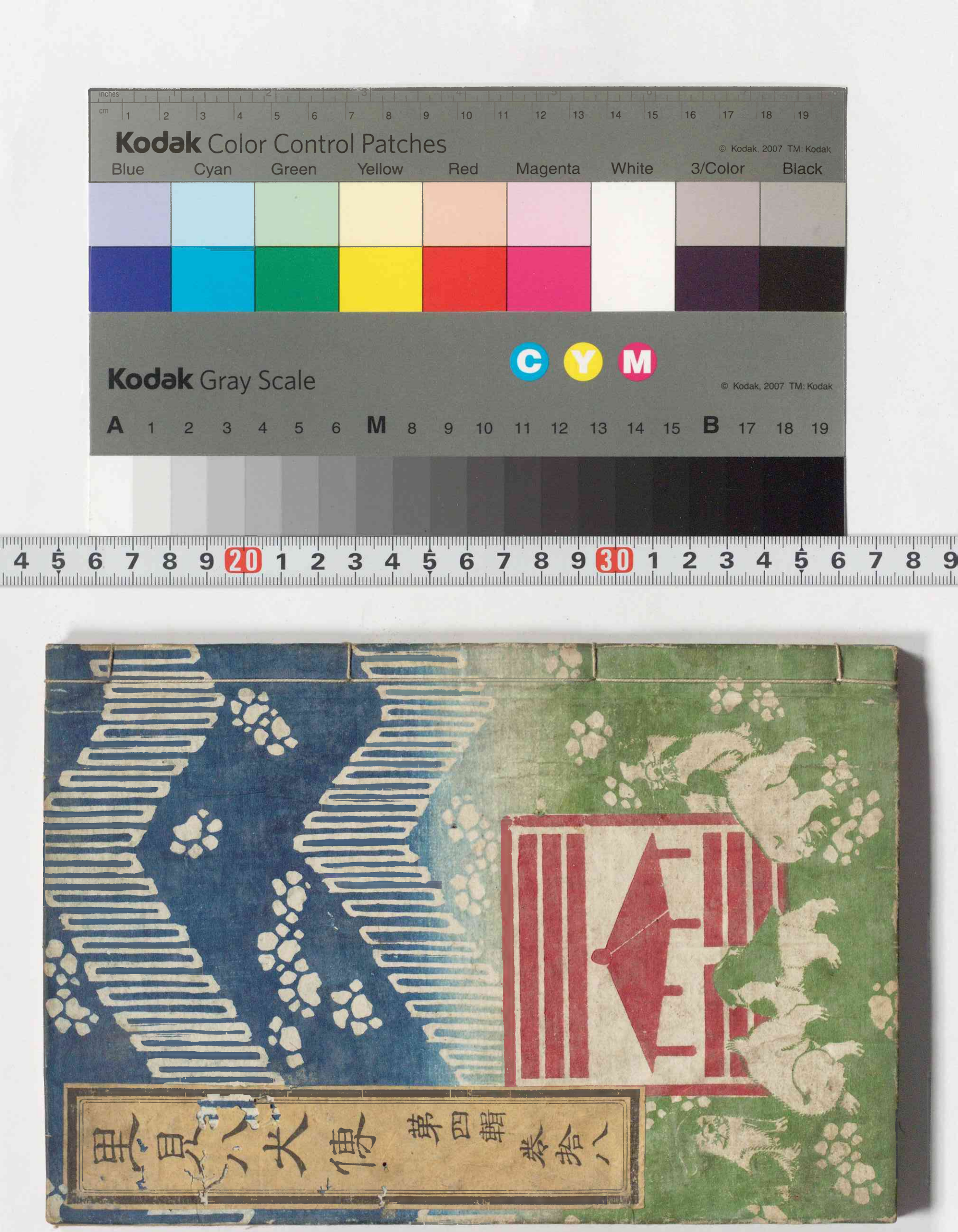

Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
八犬傳
第四輯
卷拾八

南總里見八犬傳第四輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第三十五回

念玉戲小笛弦借る
妙真良く婦を返す

小文吾は粥を再燗して、これを信乃に勧る折、高声に呼門々。裡面に入るあるあるけれども忘もあらず立たる障子を磴と引閉て、店前に走出て見れば、是別人にあらず鎌倉の修験者念玉と左右に小いと大なる梭尾螺を携て、右手に渋染の扇をもて胸のあたりを扇ぐ。店行燈のほとりに坐して、小文吾を見て、微笑を含取目令して、扨も昨夕の神輿法は実に倍く熟開なりさるその果の比彼此の侠客共が角巻は殺風景何囲の浦も壮者の幼は武速進雄の神慮寔に測りがたし。今朝還て仁

そのうゑ濱邊ハ夏秋たゞくまでの涼しくもあれ。蚊もあまたゞ。ゆめ〳〵ゆ
塩燒あが。辛死世ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

誰ぞ。措遺まさるものかとそ。とのゐの間に念王は膝を進め臂を伸し。件の留を撥ゝ寄り。袖のもく拭ひ。歌口を澤しく梵論ことく吹試さ是はいかに。尺八ゝその主定ゝるもとも今宵一夕和歌に借んと寝るとの外にもとべも。張宿るもとく甲夜の間より。厨に入りて盃の腹を肥さんはわまりに奥なり。ゝるも今宵は庚申なり。拙くとも三ゝと徒然を慰るこそ究竟のわゝあん。撥ゝく。ゝづに月とゝろべ。いでく。とのひけく笛を携ゝく身を起せば小丈吾はさもかく。あん分の随意慰めなん。その尺八を西なりと回答て躱く遽しく。燭を乗く移さ行燈を引提さく念王を別室に安内しく預ゝる行李ゝ。どを遥ゝく舊の処に来ゝ。ゝづも嘆息しく腹裏にゝゝゝ搗く加く。彼修験者に今宵の宿に影護しく。さまでとく今更に出ゝ。術もゝ。ゝゝや強顔のひゝらくも他処へ移さば疑ゝん渠尺八を吹遊ゝく夜と共に月を

俟んとゝゝ心ゝてゝる秋さゝる悪心はわゝどとも密事を知ゝ身の仇ゝ刺殺しくゝを塞んそゝ機に臨ゝ変に応じくゝ。ゝるも如何せん病臥せ。勇ゝる人のうゝゝ。難ゝ病難のゝゝ命に恙わゝどゝ稲塚ゝ帆大夫に。諸ひゝゝ遅ゝ。とゝひ延さゝ。ぬゝ遍の難題。その折に遮ゝされ。骨相圖ゝゝ心憎々ゝ。嚮ゝいとも憐しくゝ。ゝゝ抜ゝ。ゝゝ復ゝ。ゝゝ懐ゝ。ゝゝ入ゝ。ゝゝと左右の袂を掻探ゝ。衣領を披ゝ。振ゝ。紙ゝ。ゝゝ。原来途ゝく遺せ。ゝゝ夏は衣物の薄ゝに黄昏時のいとせ。ゝく走ゝ。遽ゝ。彼処ゝ。遠くもゝ。ゝ程ゝ。ゝ。ゝ。

更に奥を見えずして不覚に旅修験が笛を愛でたる貝を吹き忘れ
たり。譬へこの桜尾貝の海中に生ありて運動するのみ声を出さずして
肉を祝ひて殻を留め死物となりて吹くまでその声数町の外まで響き
うも亦如此にその居を失ひて他郷に浮浪するのみ鱗少の水を離れて
久帰るかよりもなほ似たり。況罪なくして沈落し隠れたる人に知られ
声なき貝の吹きてその音の響く如し且罪なくして罪なきその沙汰の逆
なるにその罪なくして咎を禀る威勢に壓されて順に禱る験もなき世に
果敢なく思ひ絶えぬ。とりそなへ山伏の萬より拝む名のみ聞くばかり
順逆の峯にその霽るる雲もなきそのいはせんとすれども含める貝を擲ちて眼を
睜り氣を籠めて言ひ出さねばいとでしく苦しき胸に當るみのかなしきに恨
かくてあるべきにあらざるべし又骨法を索ねて遽しく紙燭を門邊に乞ひ
程に皆とく来よと外面に喧しく呼ばれて関取在り欲と顔
さし入れて塩漬の鰹四郎を先に立てて板扱均太牛根孟六などと呼ばれる地に
名高き破落戸二人齊一店前なる板席に推並べて小文吾に見えて紙燭を振
滅して氣立て入ぶまるる二人揃ふて何度でもぶに坐せよ簀子に扱ひとのい
せも果て鰹四郎いまだ拭ひもせず肩に投げ関取今宵は些か物いふとて二
そ佛が臺座をとるとて来迎せり且録に居て拝むとのみ均太も傷ふ
鰹四戯言吐くもあり二番地取の夜警古に二人かの方に肩を入れんと禁く
佶と見えまで孟六も亦進み出関取斯皆うち連拉て来るに別の設にあらず
年来和主が弟子といへども根ぶ投もより地力ある吾が方に彼此の辻相撲に
性を取るべ大田に現れる弟子をかちぬと人が誉ればものぐさ和主の鼻高
きまでけふ一日で見限りとく浮世に倒さまぐ門弟達に師匠を破門

その酌をいろんとく。この三人は總名代今よりもくこの葛飾ふ和主の弟子へ一人も形。そろおろるよ羽ろろ頭高ふ口を利さぬそ忘ろりてく悦惚ろと渚声高る諸胡坐嘯けば聚ふ蚊を打く。膝ふ拍子をのくけて。小文吾ゆのく冷笑ハのる吠や奴原ぶ恐ぶふ物をいろまぬ欲総角の時よりくこまも相撲ど好こくぶ渕取るどいろまとども世ろろふまろふもわまど。寔ふ田舎の素人技弟子へあるとも又ろくとも吾倩ふ物を缺べ宮。情由ぶよ立ば面り。望ふ任くく破門せんその情由をいへふぞやと問ハ三人ハ膝立ろほ。いろぶも知ろろろろ。昨夕濱里の扮擇を和主ぶひとり截判ろる。適俠者とろふよ飲ど山林ふえ入ろ丁。果崎のる伜間道より逃ふ足る人より人の風聞ハ千里を走る世の常言誰とく走ぬのも形。泥嚢揚く蹈ろる。師匠ハ弟子の面汚ろふ破門ろる。そ紙朽ろとろハどや。敵ふハ正く妹夫借財でもある欲ぶどろ

さまろくろる屋河容ごと猫の糞踏ろく花の闌めハ路傍の狗腸のと和主ハ門の腰脱犬田畢竟八幡の取組ふあるもく團扇ハ怪我の功名緊要の時ふ山林ふ。ふ足も出ぬ藥罐の湯煮章魚真赤よるとても恥知ぶど陰囊をろぶ。鰹節ぶや突ぶや成らぶハ舌を焚ぶろと訓声高くふぶりく異口同音ふ向火を燒つくとも小文五ハ驗ぶる氣色ふくある復くもいと咏。扶揺ふ羽を搏大鵬の志を知ぶどく共音ふ轉る群雀ふ囑賂を養るるとゆハあるぶど果崎ふく房ハぶ敵ふふるぬハ親の為ぶ為彼ふ夫婦ぶ為員ふハ勝ふふとあり道理をろぬ白徒を避く通ふハ羞ふぶそをろハぶふ怯せ。と挾ろるめ。あぶハのふ吾身ふ絶て痛ふも情由ぶふ仆ぶ要ハふの。とく満と追立ふぶ。三人齊一身を起し。邁といハぶも去ぶろんや師弟の因ふふくなるとも。この一郷の面ぶせるる人の口ゆハ戸も建ふふぶ他人ふふり。後日の

て形ハ極印打んと鹹四郎が肩を拳と共ハ足を蹠ふく筋斗を打て墳く
蒐る孟六と均太が脱を捩揚く起んと春蟻く鹹四郎が背を楚と踏居まべ二
人ハ足を翹げ面を皺めつ天うち仰ぎ痛や脱が拔ん放せくとだ
くハ共音ハ弱る鹹四郎。かぶ死めるん大の字ハ身と平めつ眼を睜り
苦しぶる堪ぶ人をもあま目子が花も出まべいふせん背骨が折
るとハ叫べどおのが名ハ塩辛声敷板掌く喘ぶ小丈吾ハ行燈の
あらめと懲せ隨ハを緩めど奴原骨ハ折ぶ怒ハ親の戒人
の巻を禁るのまるまうう巻ぶ抗るハあまど是ハ過ぎの好ぶハ一度ハ計をまく
ゆけとまま二六均太を推遣ぶくひとろまぶ外面へぞ倒撲地と突ぶぜば
三間あまるまま跟まと走跌ぶ轉輾ぶつ又鹹四郎を引起く項を絅く推落
さば糾まるぶ如く凡走ぶまのあまを倒まるく皆見くハ沼まを起を狐の如く

まるぶ足ぶを猫の如く背を高うく毛ぶ起まるぶ或ハみぶぶ脈を診
る或ハ腰を摩沙手ぶ膝頭ハ唾を塗ぶ口を喝め眉根をよせく此彼等く息を
吻ぶ迭めるよ或ハ掖扶くやと諸声ハ立あぶ鹹四郎ハ蚤の籠ハ啼く如く
舌ぶち鳴ぶ均太孟六疼ハ去ぶまどや俠骨を磨けばかぶまの四訓ハあれど
利生ハ寄間のまるまと咲けば二人ハ俱ハ嘆息ー循環ぶまぶ七難ハ苦ハ婆
婆の厄力ハ負ても口ハ勝ハぶぶまるハ身あまどもいまぬハいふ外飲の地酒
二斤ぶ氣をまぶぶ弱るまぶと慰めまる均太ハ腰を擂揚くまぶ遽くまぶ
かまぶまぶ玉を送ーまぶとのハ間ハ孟六まる足ハ踢まけく透ーまぶまぶハ
ぶまぶと連緡銭二百遮与せば引提く誘まく先まぶハまぶ腰を反ぶ折んぶ
つれ拉く野干玉の夜のまかまハ味酒屋三輪の杉の巣窠ー馴染の店を投でまく
足音絶て寂寥たり小丈吾ハ行燈の戸口を出まぶ推向まる身外面ハ出まぶ

表紙 妙真 辟易之図
讃岐屋

門の戸閂と引よせる。樞ハ一重夜ハ五鼓打漆里の鏢子木も恒よりも早ク心地
しゐ。優く獨うち点頭ハの頃の夜の短さよ。今暮ゆくとゐひ〻ふ白物ハかゞ
らひく可惜時を移しゐ。彼奴ハがよ〻も彼く置かり〻高声のさゝやく奥へ
ゆくえけめ。おりくハ其外ハも彼外よも影護〻と。もとゆまぢ。果ぬ寸思の片胡床
膝を抱くくつぐと。ゐくハ悲〻親のゐゆ。今ハいらゐゐ〻。ハの夜を明〻ゐゐん。
暗ハ外ハゐませが寢ぬまぬゐ蚊のゐゐんゐと痛〻紀限ゆまとも。今宵一夕
堪ゆ田圃を沽ゆ。家を售う。財ゐく贖ふゐ足ゐまゐ已ゐり代ゆまでも救ひゐ
術ゐらゐゐ。ゐ救ひゐゐハ奥ゐ彼人破傷風の妙薬ハゐゐ亡伯父の傳法ゐ。
然ゆとも求め易ゐぬ。鮮血ハ今ゐゐ股を劈紀絞ゆ取るともゐゐ紀がそれハ
合ゐゐ女子の生血絶くゐゐゐゐれとゐゐ身を傷ともせんゐ紀ゆ只ハ彼人を
解ハ無く今宵潛ハ走んゐ。ゐく里の出口ハ水陸共ハ豫より警固の

兵ありとぞ。ゐくそを殺閑紀く脇ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐ命危〻。嗚呼ゐゐ
ゐゐハ天ハ日ハりハ滅ゐる人のゐゐをかくまで照〻ゐゐゐる彼人ハ是孝士なゐゐ
ゐゐ親ハ是義士ゐゐも有繋ハ孝と義の一隅を知るゐゐゐ善ハ與〻く
福ひゐく。義ハ仇く禍ゐり。然ゐく恨むゐ紀ハゐゐ世ハ幸ゐゐと幸ゐ紀ゐ
亦その人の善悪よりもゐゐゐゐゐゐけり。そを天命と知ゐゐ紀ハ縱元を
喪ハとも。ハの志を移さんや。ゐゐゐゐゐゐ〻ゐゐ曉るまで計策を沼ゐゐもゐゐゐ
ゐゐゐ皆画餅とゐゐん游我ゐる人。現八の萬ゐりせゐ又商量をせんゐと在ゐゐ
便ゐく在ゐも便ゐ。いゐハまゐ紀と胸ハ同ハ胃ハ答く憂ゐゐくゐゐゐゐゐ餘り
ゐゐ明の鹿ゐゐゐく夫八の笛の音奥ハ吹ゐゐゐゐ妙ゐ管の名も思按も
今宵一夜きり望ハゐゐう〻友のう〻ハ伝ハメルゐ人の智をカルゐ〻ゐ〻くうち
フサク。ゐゐをゐ何日ゐナヤスゐ紀ゐゐ遊ゐゐゐ彼修驗者ハ按尾貝ハ

雪夢に成て所詮の心の前ら
ずもなく生ながらへ
ずもなく命の
ずもなく
ずもなく
ずもなく

そぞろや尺八の音ふかく吹遊む夜いたる五半輪の月ふ代る篇挑燈を轎子の簾ふ照さしく引そゝぐ外ふ来るあるあり年の齢い呉竹のよそぢあまアの婦人尚黒髪を惜けるく断ろ侭の短髪元結田の髪友挿も目立ぬ無地紹の羅衣ふ白帷衣を下襲前結せ〜繻子の帯ふ結副ろ韓組紅を柳の翼ふ山鶏の雄の下垂尾の長庇向上く門ふ進ん迎ん物やうさん呼門く樞戸をさと引開ぎ小文吾ハ有りひろ頭を擡佶とんくさ出ん

今ふる戸山の妙真さるなりぞや甲夜過ぎるふ只一人欽何事あやとく来ませ〜と問ふ微笑うち点頭のる吾倩のさるまど沼蘭と大八をるく来ちまど迎ふく暮ん乞ひ彼ふを轎子ふ乗しる死吾ハ持病ふ血暈あり轎子ふ早く揺ろ歩ゆくも夜行も涼〜ふ来るふ嫁役者倶せ来ぞゆく水入らぞる推鬼客時ぞ戸ふ巨戸を開くもひねと他事ふくいつまで小文吾ハ今宵ハ疲ぞ折ろく来る人の斯ふ来ふ土間ふ息杖衝立進ん入る板席ろ框際まぐ轎子を横ざるふ早〜居て簾を直と揭揚ふ沼蘭ハ熟睡せ〜大八を膝ふ乗〜る縮羅の単衣緋の膚絆帯ふ段子の黒入茶の交野賽を片締〜く照斑の玳瑁櫛笄鎌倉様ふ田舎備ぞ花ふ月ふ見えても十九ろハ蘭〜子ふ遭つぐ別来〜心の痛ん色ん〜く轎子よりぞ夜の鹿秋ふ流く大八を抱ん降りく背を敲著け家兄談暑ふ怎ろく家ぞ来いよ健ふ〜ぞ低る頭の病ん撲地と落る叙児も別の櫛ん〜ち歎く涙ぞ〜ん〜せ〜と背向ふ〜く閨ん〜ぞと姑の背ん盾ふ取く〜ろ當戸

山の妙真を轎丈ホをコえうやく。噛人さよりや爰中ハ過ぎしも吾倩ハ今霄退る
ゝ。その前面ゐる板根のわゝをハ南を向く涼ゝゝん且く其丸ホ俟てよとのふホ
皆ゐゐろゐく轎子を外面ホ擡出し巨戸を磴と引よきく辞ゝ出ゐ丸樞戸を
又あゐさより鬣をける且ゝく妙真を小丈吾ホうち数ひやよ阿男答ゐを臥
房ホ入ゐゐ扶堪ゐ丸まで炎熱ゐるホ恙ゐくてそゐをもゐ去年まで嫁婦
ども孫をも神輿洗ホ来ゝゝ且ぐ。さのゐハ何ホう事のゐゐくゝ生ゝゐ本意
ゐゐゐ丸婢児達ハ知ゐぐを。と問の言ヒ葉ホ花ハあ且ども小丈吾ハ両夜の月と霽ぬ
疑念ホ眉ゐち肇め否家翁ハ人ホ誘引ゐく真角ハいゐたくのまぐ還ゐを婢児
們を走百病ゐ奥ホ止宿ホ修験者のを折のゐろくて人氣ホく欺待態の疎
さよ納戸ハ絶ゐく風も入ま尼且くゐホく相潭ゐ扶も婦人の夜行を獣ゐく沼蘭
ゐも扶く来ま色ゐハ大ゐくゐゐぬ故ゐてそゐめと問匂ゐまゐく妙真ハ衣領推

緩めくホ膝を進め現推量せゐゐ如くいとゆひゐ丸ゐゐまども凡貴丸も
賤丸も男女のうゐをーホ親の隨意ゐろのゐゐねど年来夫奴睦ーく孫さ
ゐく牽ゐ母ハ老楽牽ゐるあと近丸ゐゐの人さホ美れハ今恥ー丸夫妻
口舌の縺ゐより。憎ゐぬ嫁婦を離別の断ゐ悟ゐホ来ゐる仏の若ーさ神
ゐゐぐーく誰ゐハゐゐん。ちぐめ紙いくばいぬゐ日のハ幡の相撲ホ房ハホ。ゐ男ホ
負ゐく分りしゐを。左ホ右機嫌のゐろけまど敵ゐハ沼蘭ゐ家兄ゐ慰め
ゐーとの子の當惑一日二日と歴ゐ程ホ何ゐひゐん房ハゐ生涯相撲を取ゐ
じゐく額髪を剃落せー。昨夕俄頃ゐ瀆邉の打擇和げゐひーゐ男の截
判如才ゐゐゐあゐざめまど根ハ腹さちのおさまゐぬ前ゐ丸ゐゐホ房ハゐ
憤恨甚ーく女房ゐゐくとの確執の黒白を判るゐく母ホ諫も用ゐぬ短慮媒妁へ
去歳の秋古人ホゐゐゐ今ゐゐホ誰ゐく相潭ホゐゐもゐゐを人ホ送ゐく

ばかりでなく、世間の情由を解説するなどの事、なかなかに難儀なる事ども、
ようやく、一夜の間に、ようやくに、ようやくに、ようやくに、ようやくに、
ようやくに、ようやくに

ら且のくその艱苦を受るとも恥も厭ず恨をもせず品よく応接しあるべ。十日の飢渇ふ糧を獲て千年の齢を延んより。これ歟よりとる歟びの又あるべしゃとだろうよ涙坐ふたるあり落く膝ふ抱く子も袖濡さるく隻とも空しく使きぬ搭壁ごふ掲げるを當下小丈五ロハ又紅くるる紙釋く氣色核さる行燈の灯光ふ妙真を佶と見て大家離縁の趣ハ大ることなるべしこれだ今ハ一个の難義あり。沼藺ハ親の女児人某がところ成りて居ハ妻せざる紀又この家ハ親の家ハ親の他彩ふ離縁の断て義引ハ道理ふ背ん次大ハを幼稚ふ母ふ隷らるべ元めるまど老父ハ今腐還らん歟明日も明後日も逗留せん歟その時日ハ定らるるぬ留守ふ入るを女弟でも一宿ふ留めるて人丁貴人この侯るるかりい親の在宿ふ入ん日ふ又出ん日と来ふひね某が知るしえ。と教聞あるく立ん時長ん訣を楚と引とめ阿男ふハ辞がたらん氣をとゆ。

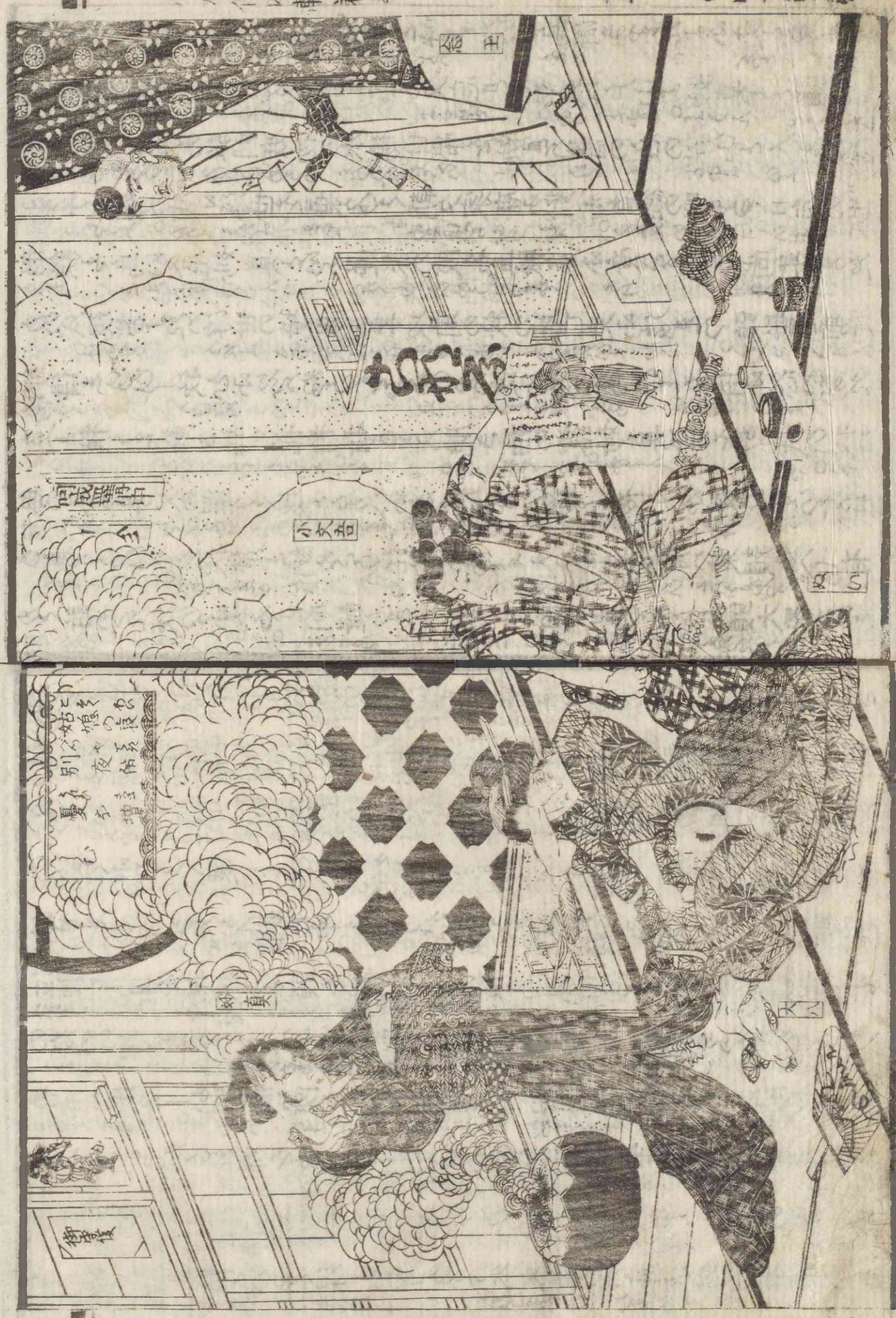
鎮くゆメ見、雅居く見ちかく姑と婦の中のるるハ世界の不思議と人を沼藺らるべ老実ふ房ハふ弥ますまま惜るぬめをのつまぐうまるーて外ふ又房ハふ弥ますく惜るぬめをのつまぐうまるーて外ふ又房ハふ夫の意地一旦立て後ハ又治る術のあるもせん縦答こハ在さぞとも留守の役受るものハが道るべ又大ハを坐卅のうへより左の巻の人を。物を命ることかるへねば在弱者とく持あまー母ふ添ーく来せー欲とるるるゆや知るも侍れど在弱の孫を可愛さの八ーなふまるて侍るの武者母ふ隷く来せーを子ふ覇さるーく房ハが武れるるも折るるー孫共侶ふ婦をーも召えさせんとるるハ挿頭の花欲堂の中るる王欲と一三日側るるさぬ一個の孫とるふ留めく祖母ひとを別るく何れへ還るべ紀巻ハ

知恵ある人の命の長き事は、昔の人の物語りに、聞き及ぶ事なれども、
今の世の人の命の短き事は、目の当たりに見て、
知る人多し。
昔は、人の命の長き事は、
一千歳、
八百歳、
五百歳、
三百歳、
二百歳、
百歳、
八十歳、
七十歳、
六十歳、
五十歳、
四十歳、
三十歳、
二十歳、
十歳、
五歳、
三歳、
一歳、
生まれて、
乳を飲まず、
物を食はず、
言葉を知らず、
歩まず、
立たず、
坐せず、
寝ず

[illegible]

[illegible]

[illegible]



あると婦と姑とのうく縁にありうぐら本末遂ぬ産灵の約束事ゆえ
あくめ人の心ハ善も悪もうちうくあるめるねバ只鬼々〻〻ゑとの婆ゝ兎
毛だらけも無ゑ婦を追出せ〻と人めいのうこれも玄孟の諄言るゑ紀然ば
吾倅ハ退ゝ〻お沼蘭ハ陝ゑ心ゝ病煩ゆく親同胞ゆ劬労をまゑ被ゆひそ夏
の夜のゆゑさゆくとも大八ゆ衣推脱〻く寝冷〻く風ひ〻煩〻ゆるゑ乞をくれば
泣腫せ〻目を推拭ゆく頭を擡幸来のれ高恩亮つさせる孝行を弱〻も
沼せぞもゑうゆゑ別ゑゆゑそゆり真夜中ゆ沼ゆうちん郷ゆも
あゆるゆゆるく還〻ゆるゆゆるゑ若〻さよとのひけく人をも落る涙をもとゆめ
くそぞ共侶ゆ惜む別を慰貌ゆ又吹遊む尺八ゆ妙真ハ耳を側く彼笛ゑ音ハ
鶴の巣籠燒野の雉夜の鶴九生ゆ活物夫婦の良別親子の恩愛ゆゑれを
疎ゆゑとせ〻あゑゑゆ別あゑ欲ゆまバ憂ゆゆるゆゆやハと將ハ〻く涙をさ

ゑく小文吾ゆ告別〻く立鳴の翅ゆ遺を一滴濁さぬ水ゆ任ゆ。見送る兄ハ
辞を妹をゑと音ゆぞ泣く心細けゑ繁桟の門の樞戸推開ゆ妙真を外ゆ
出く。ゆく〻と呼ぶ程ゆ轎夫ゆハ遠〻く轎子をゆく来く保屋ゆ乗ゆぞ
ゑと促せバ見ゑゆもせぐ頭を掉。廿二日の月ゆゆ。生ゆゑ天の色ぐまぐ。
夜ハ既ゆ更ゑあゆゆ市川へゑ還ゆぐゑ豫く用意せ〻今宵の宿をちゑゆ
あゑと吾倅ゆ跟くく来ねと竊ゆゆゆゆ轎子を打〻く赤羅引東の
町へとのそげとも進をかゆゆる足引の山路ゆり入る心地〻ゆ迷ゆハ胸の私雨ゆ
露けき袖をうち合〻。ゆゆも頭を傾けく。ゆゆひくぐ孤ゆる。

第三十六回

忍を破りく犬田與山林戰ふ
怒伐合く沼蘭四大を傷害を

人さまぐゆ志を道引ちぐく。かゆる折均太孟六鹹四郎を。甲夜の遺恨を復

[illegible]

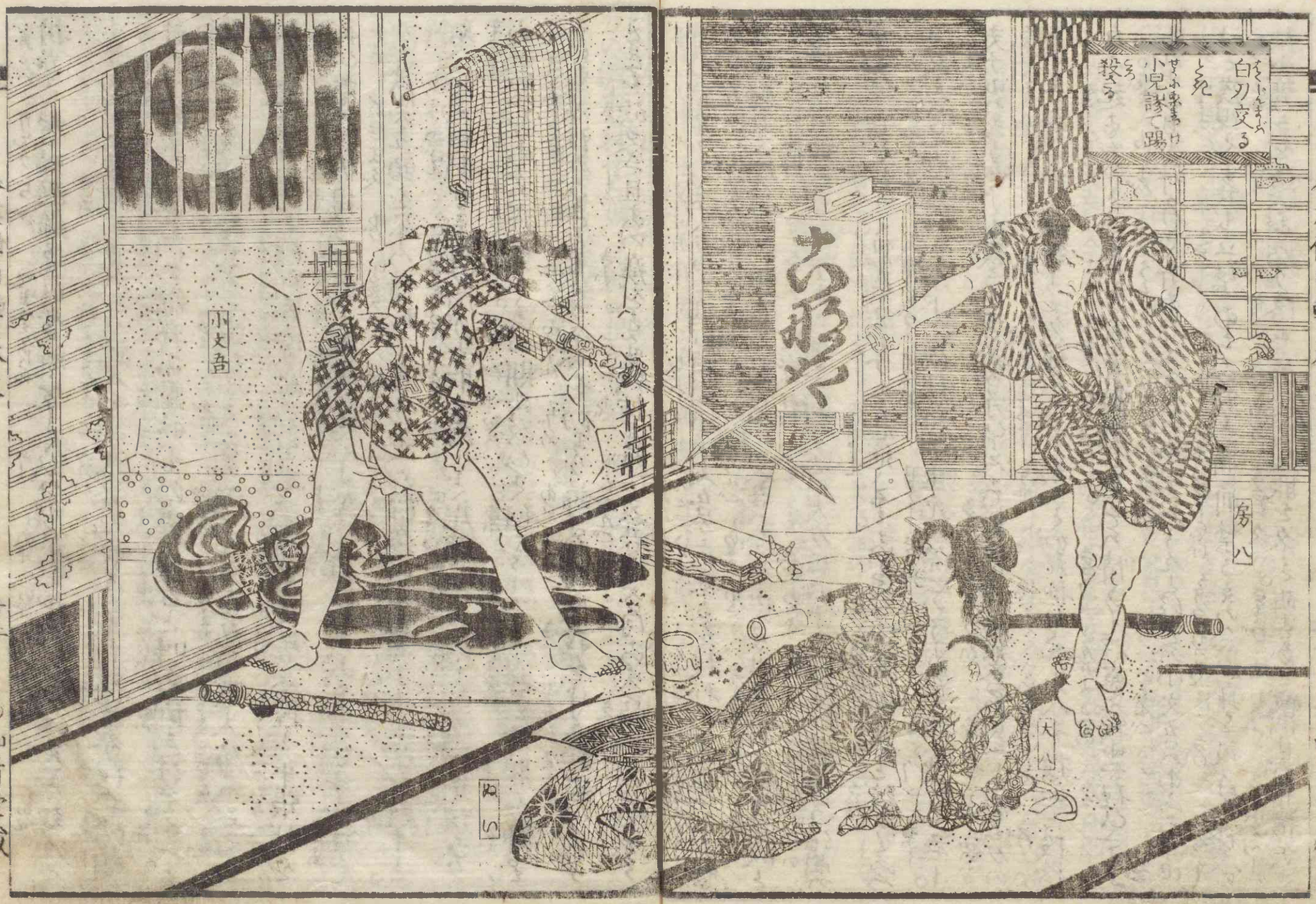
[illegible]

[illegible]

今宵は雲の晴れ間に月の出て
雲間の月の
雲間の月の
雲間の月の

雨ふりまさりて壊も堅き石ひしるに成ぬるのまゝふのひ果てゝ自の火も滅んなふ
睦ミ相潭ふく親をー救ひとゝ多。浜ふかゝるる辛ひの又あるべーやと氣紙
岡く彼方此方を和諭ゝく声うちくり。泣涸くを簀子の下の蟬も霎時その音と
とめけゝ。小文吾ハ今さゝふ事を好むふわゝねども。さう移く怨む房八ふ既ふ
大事を知まゝくが忍べと親の箴よ刀ふ被ー紙素をゝ今を厭ふふ皇あゝぞ。
顕身の息ある程ハいでゝ彼人を遮ゝぬべきとゝのゝべ此ニも退ゝぞ立ぶ強ん
と刀の柄を握詰ゝる指の汗ふ鞘釣も濕る可ゝ當下房八ゝもく焦燥く。
ゝるゝ死女子の截判泣ばとく口説ばとく。室の山ふ入ゝとゝぶゝゝ紙空して
かゝらんや。喧嘩の側杖打ゝよゝ。其処退ぞゝと敦圍く衝と立さまふ礙と踢る。
凡頭狂ふく大八が腹ゝを蹴く多ゝぶ苦と二声叫びもあゝぞ。そゝまく息ハ絶ゝ
けゝ。沼蘭もその子を抱るまふ横轉輾くゝと泣く房八ゝ紙物ともせど。

信乃ハまきゝゝ子舎ふと進む前面ふ小文吾が立塞るを拔打ふ拳尖くゝ丁と撃
刀を鍔ゝく受留ゝぶ紙素を断ゝ。小文吾ハ今ぞ仇なる堪忍の二字も反故と
恨の刀尖拔ゝゝ丁々と鬨を削る迅の大刀風四下を蹴立く戦ふゝ沼蘭ハ
ゝ多く身を起ゝく兄ゝぶゝ子を息絶ゝ。ゝゝふせんゝゝゝと泣ゝゝ
兄ゝまぶ兄と良人ハ一上一下と砍結ぶゝる生死の際。この子もいと惜。彼首も危。
夫子ふハゝゝゝゝ殺ゝゝくゝが分ひゝゝで赦ふ生る甲斐ゝ死火宅の苦ゝ刀の
下ふ玉の緒の絶ゝぶ絶ゝと忽地ふ志を働ゝく力死抱ゝる大八を撲地と投捨
身を起ゝ哀ゝゝゝまゝく些も擬議せぞゝふ情ゝ短慮ゝ物ゝ程ひゝまふ
らん止ゝゝと呼ゝく打ゝゝ白刀の中へ入ゝんと泣ぶ小文吾ハゝぶゝ但
けと疾視ゝ。甚も立ねどゝゝと摘前禁る女の念力身を投ゝく良人の
袂ふ携ゝるを透さぞゝ落を房八怒ゝる眼を反ゝく碍ゝゝと蹴倒せぶ井撥矢ゝと


白刃交る
光
小兒誤て踢
殺る
たらひ
房八
犬山
小丈吾
犬飼

折敷く髻結断離る乱髪縺ゐ〻く臥ひも足を抱けば踏ん〻まく起んと
しゐる頂の上ゆ見く良人の刀踏へ〻ん小文吾を殺んとうち振る奏相で沼蘭が
乳の下磯と砕る。炙門の深疵ゆ愛時も沼堪も苦と叫く倒まけ見へと
駭く敵の透間を窺ゐと進む小文吾が肉〻さる白刃の電火房八を右の
肩尖ばゐまとんと砕割と合ゐ〻ゐ刀を曳と捨く尻居ゆ揑と平張什を。
再び駆んと振揚る刀の下ゆ房八ちやよ等大田のめとあやとせゐく禁て
左ゐ突き頭を拳ゆ蜻蛉の息吻あへぬ深疵の苦痛小文吾を詐〻と。
思へば些も由断せで血刀肉〻と取る肩しく片膝突く佶と疾視卑怯ゐ
山林いゐゐあへば疾いゐぐゐの期ゆ及びく何ゐゐ少んと窘まべ眼を睜ま
その疑を理りゐまとも。ゐが本心を初より諦さば特ゆ義を守ゐ和殿ゆでゐ
ゐ且を砕ぐき且まの疵をとゐ殺抗まべ小文吾をゐ見あゐ沼蘭ゐ

刀の濃血を拭ゐく遽しく鞘ゆ納め。単衣の袖を断離ゐる拭と結合〻く房八が
瘡口を禁と巻て端〻結びまをれ房八疵ハ浅かりゆゐるゆあへばゆ少んゆ〻ゆ
や山林と呼ゐ〻れて息を吻ゐ嘶阿男大田殿栞崎まく理不盡ゐるゐ〻ゐ体ハ
豫より和殿ゆ怨を蒙さゐ〻ゐ難義を救んと思ひゆゐれど事成らぎ親
の諫めと堪忍を守ゐゐゆハまべもゐく〻ゐゆ有ゐ〻ゐ大勇ゆ〻ゐ少く羞て立別れつ。
さゐとゐく已べゐとゐゐ〻ゐ母ゆハ豫ゐ〻ゐ示めハせ〻ゐ〻れバ沼蘭を離別ゆ
假托て甲夜ゐ〻り和殿の氣色を試ゐ今宵再び推く歩て。ゐ〻ゐく本意を
遂ゆゐと出れべ小文吾眉根をゐちゐせ。ゐ〻ゐく〻〻山林。ゐれハ沼蘭ゐ兄と
いゐとも和殿ゆ大恩あゐめゐるゐ。然〻をその身を殺ばまでゆ志を盡さま〻〻。
疑ひの〻ゐ〻ゐ。縱和殿のゐゐのて。可惜命を隕もとも今宵ゆ逼ま〻ゐ〻ゐ難義を
救ゐ〻きゐ〻ゐゐ。ゐ見疑ひの〻ゐ〻ゐ。故ゐゐと問詰れバ房八ゆ〻て声を潜〻れバ

とて甚だ言ふべくとも竹を以輪囲の説因果の理物の本ふかくまことも皆こゝろ入ゐわくべしとて一切ものひとみまく果敢なく今般の懺悔さらも面目なくこゝろ一昨年の秋世を逝りしこゝろ父の病危くして時竊に母と某を枕辺ゐ迎つけられいまの小厮ゐ。まのわこゝろ上りく一子房八成長りぬ。こゝろ齢五十を超て一期の望分ゐ過ぬ。あれども。もろゐ恥るとゐれば戸山ハさこゝ房八ゐも素姓を定ゐ告ざるゐ。忍ばるく竊に出るのゑ柳こゝろ父ハ杣木朴平といれる。安房の青海巷村の百姓なれ性とく武藝を嗜ゑ殊更ゐ侠気あり。この故ゐ故領主神餘長挾介光弘朝臣譜第の忠臣金碗八郎孝吉の武藝を頗ゐ景慕して。その劒法を受んとく。彼家ゐ仕へるあり。かくて又年を経て。佞臣山下定包が。神餘の執權なるゐより。淫酒を勧めく民を虐げ。逆謀萌を見せども。光弘これを曉り

なれど金碗八郎ゐ。ものいふ諫るゐ。ハ皆追ふく。その家竟ゐ乱れこゝろ。こゝろ父を是義氣ある人なり。里人ゐ為。金碗氏の為ゐ瞋憤ゐ。こゝろ定包を殺ん。とく。同志の友ゐ。洲崎ゐ垢三とゐ壮夫を相譚つ。彼定包が遊山を窺ハ落羽畷ゐ埋伏しく乘る馬を心當ゐ射く落せハ。雙ゐ。領主光弘ゐ。ゆゑ。しけるゐ垢三ハ當坐ゐ殺ゐ。こゝろ父ハ領主の近臣那古七郎と血単して七郎を砍伐せ。その刃遂ゐ生拘くして。躰く刑戮せ。けゆ。この條の錯慢ハみゐ定包が奸計なる。こゝろ父漫ゐ。ゐ。ゐ迷ゐく。かくも領主を犯せ。こゝろ金碗氏ハ里見を佐く功成ゐ名を遂し。後禄成辞しく自殺せ。こゝろ父の故と。安房ゑ。當時五侑ハ十四歳母ゐ曩ゐ方まゐゐ獨安房國を亡命しく。この地ゐ漂泊ゐ程ゐ里人ゐ汲引せ。こゝろ。この小厮ゐ。ゐ。ゐけり。ゐ。ゐ年ゐ。ゐ。ゐ切て仕へ。ゐ先主人ゐ愛敬ゐ。ゐ。ゐなり。ゐ。ゐ家督の

男児を産めるを吾倚を女婿小文吾と成さんと思ひぬ。されども小文吾は歳より通家なれば房八が
舅文五兵衛は那古七郎が弟なりとぞ。今歳七十に及ぶ。灰心雪ぬ渠その背に兒
の雙言なる。杣木朴平が孫なりとて。その女児を阿谷と
房八は弁眉を顰ひそめ。恨を復さまたるを疑ひて。口舌もあるまじと怨を
隠して好を結び終に子孫の患を遺さんとまづ沼蘭が怜悧を美む
媳なれども。いちもつく拳なる孫小乳房を放さじと云せんいとしく思ひ
那古が弟と知るべしと通家なれば悪因縁孫が業の人なるを
ぬるを三世の後まで怨讐彼力祢ぞ神餘那古金魂の崇欲と思ひ屈して病
煩ひて死期ちかくなりぬ。人の怨を解んとまづ陰徳をもとめなり。
房八は親に代りて祖父の為に汚名を雪め彼舊怨を釋とめんと寔に
孝行なる旦房八は祖父に肖て侠氣あり武藝を好む義のあるを

命も惜まず戸山の心を雄しくなりぬ子を諫めんと竊に遺言せんとす。
父は義理に懼きるの既已かくの如しまた親に及ぶとその子なる志を嗣
ざるべやとひたすら祖父の汚名を雪ぐ為に杣木の杣の木篇を除く下なる
木字に相合して山村と名告れるその比あるべきかよりぬ
男文五兵衛殿親子の為ゆへ人に異形の志を竭して後に親の遺言明を地に
生ずべとぬ人ども折もあり實義をあらを術もなし。さるべきぬる日八幡の相撲に
和殿と目星に指して修験の募に任せるあり。吾倚は絶く勝負を
好まず技も力も和殿に及ぶべくもあらざれども怪我に勝ると念じて果
く負しを敬びて。何でか孫とそ成ふくとのひとに娘るあるべらん
のみかくてきのは祇園會の神輿洗を親ぶとその濱に来て遊ぶ嶽父
兵衛を訪んと思ひて入江橋を渡る程に嶽父を遥に水際なる蘆分船の中に

さく怪し死面個の壯佼とうち相譚あふ必ち端なく呼もたてこ所ふそのやうふ
近つけくいろいろと竊ひそかにけふ犬塚犬飼値遇の奇譚和殿も亦その相
似る玉さえ痣さえあるよう成ぞく小まもく感激しく今更出ふ出ぞ蘆
原ふ躯ひく獨倩ありふ中ふ且も亦相似る玉と痣とあるつぶ彼人この隊ふ
へく世の豪傑といひもえ成過世ろくさるのあるまぶ義を結んと願ふ中ふ許
さ家ろうわ同盟の浅ハ協ぞ。當所八千巣の采地ふ。滸我の御所の御方
ちり犬塚犬飼穿鑿せ。ろ且く。難義ふ及ぶとあぶ竊ふ男よ力を勢しく
ろぶ性命を隕ぞとも。義名を船を救ばくんや。ろくくんふハろぶ父の遺言を果
さえるふ只との時へあるべと竊ふ決めぞかくそのの日ハなや暮て彼人ハ
古那屋へとくあるーの翁ふ伴ぞろ和殿ハ和殿と留ぞく件の船を推流ーぬつ
衣ぶ背負ぞ立ろくんとせろるふぞ。あまぞふ遺恨を八ぞ蘆

原ふ立八出ぞるのひろ所ふ恍惚ふ引留ーを和殿ハ癖者ろうとて。振拂ふ
ふ勢ひふ強く呼もかけらぞ且く挑争ふ程ふ吾倩ハ膳をいろく打ぞく。
倒ろ間ふいちを方和殿ハ走ぞ跡ふ送せ。麻衣あぶ倘他人ふ拾れ
ぶ殃危其外ふ起らんとぞ八躯ぞとあぶく更闌ぞ宿所ふ還ぞ母ふ
ぞ告ぞあーふ犬塚生追捕のるを莊官より徇らぞろ當下ぞれ
又ふのふうぶ男ハ客店ろう。彼人を舎藏ふとも人の出八多ぞ程も
ろく顯ぞく犬塚犬飼ぶ親子も罪せられぞく今更ふ
義を結ぶろ人を出ー遣るべくもあぞ呼詮今ろ命成限ーく其外危
窮と救ぞ竟ふ脱ぞろこのふ入江の蘆原ふくぞ。ぞ網窺ーふ
彼犬塚ぶ面影八ぶ面影ふ似るふうぶ。さぞぶこの頭をあく犬塚生の首
級と偽ぞ滸我の使ふ遣ふ。ぞ嶽父子ふ出ぞ。犬塚生残落ーるる

便宜ハこれ[illegible]あるのみ。されども似ざる所あり。吾ハ相撲を好む故ニ額髪を剃ざるにその面影ハ似たりともいへども俗あくハ欺くて[illegible]と心づくハ雲時もわくごとハ幡の相撲ニ負されバ生涯土俵ニ足踏みじと寓言しく今朝俄頃ニ額髪を剃落さ[illegible]鏡を把て照ーれバ年紀さへ面影さへ大塚生ニよく似たるよりていよく深念を決し竊ニ母ニ云云しかのーを告ーるバ母も涙さしぐみく許とべくもわくごまべ[illegible]も有繋ニ請ふく自殺の遺書をる程ニ母ニ[illegible]も閑窺て禁めさてとかうまく許されけるバ母も亦義理ニ怜悧く思ひ[illegible]今生の告別ニ皆いひ盡し縛の中ヲを知られ為ニ俄頃ニ沼蘭を離別して親家へ文をとのひ[illegible]ら離別の文母ニ任しく[illegible]てこの濱ニ来つるに菜崎まてさしまく和殿ニ宿所へ還さふあひぬ折ふし往返の人もなくバ殺ま[illegible]ん実便宜の場え和殿へ身ニ引ふまに意

あくこも大塚生とおぼ面影の似たるを視る目ハ誰ニもかくなるべ。ゴ死ぬるの後ゴ頭りく彼身かわりニ立むそと心つくゴ[illegible]ハ些も躊躇を濱里の確執ニ假ふく埋不盡ニ譴罵ゴ蹴倒しくも[illegible]争ゴ親を[illegible]堪忍ぶその孝心ハ[illegible]本意を沿遂を別まゴ途より酒を酌んとく只管誘ふ[illegible]得を先ニ立つ[illegible]ー拔ゴ取く返しく稲塚の辺まで来つるゴ和殿ハ既ニ難義あゴ滸我よゴ大塚追捕の大将新織帆大夫と中ゴんゴ駄兵ニよゴ囲ゴ剌嶽丈丈五兵衛殿ハ縛らまく牽れゴ[illegible]と胸を騒げども救ふべくもあらざまゴハ数蔭ニ躲ひく一五一十を見やさこのかくく和殿ハ扉口を脱まく家路をさまく遽しく去まゴ跡ニ一通あり取揚て見まゴ彼骨相圖ゴ麻衣とのひ繪圖といひ不思議ニ他人ハ拾まゴ[illegible]ゴニ入る縛の事ひ今宵ハ決しく本意を遂んと思ふ心ニ勇あり豫て示ー

破損防止のため現状のまま撮影

めゝ〜こゝに宿ゐ起ちく。嚴ゐ母ゐ来ぬ候ゝ云云と密告報て彼骨相圖を
遞与せゝ和殿ゐ心を騒〜く。今宵秘ゝ〜ん為ゝ紀さ房ゐより甲夜の用ゝ
背門の辺ゐ潛来ゝく犬塚生の大病も和殿ゐ苦心もよく知ゝて頼ゐ阿舅
大田殿ゐ頸取ゝく役ゐ〜て。山獄父の縲絏と犬塚生の危窮を救ゐゝ段就
めゝ〜せぬ紀恕を釋と〜ゝるゝば。ゝ〜ゝを一期の功ゝ〜く。昔杣木朴平ハ定包を
殺ゝ〜く領主を犯〜て剝那古七郎を擊とゝゝ。且その師ゝゝ故主ゝゝ。
金碗氏ゐもこの故ゐ腹を切ゝ〜めゝれども今ハその孫房八ゐ云云の義烈ゐ
よゝ〜。孝子義男の忠臣。山獄丈の縲絏を釋ゐ紀と口碑ゐ送〜ゝゝハ
らゞ。祖父の汚名を雪むゝく。父の送訓も空〜う付ゞ死〜く栄ゝゝゝ。
百歳の壽を保ゝく富貴の人とゝゝ〜ゝんよゝ〜ゝゐ〜ゝゝゝゝゝゝ。
紋ゐ就ゝゝゝ不便ゝゝハ沼蘭大八親子三人ゐゝゝ日ゐゝゝ所ゐ命と隕ゝ。

亦是祖父の悪報紋妻子ゐハ一毫も意中の機密を告ゞ〜ゞ怒殺穆〜く
ゝゝゝゝゝゝ

破損防止のため現状のまま撮影

送訓を受て書忠を釋て為に身を殺して仁をなす心操こそ微妙けき。和殿の祖父が謬て犯せる罪を重くとも子孫三世の今日その汚名を雪る孝順和漢ふヨみくあるべしやいぬ大塚生の面影ハ和殿とよく相似る

めのうら累世の主君の為ふも身を殺してその死ふ代る忠臣ハいと稀なるふ和殿とこそハ通家なれ犬塚生ハ相識なるまで且八幡の相撲より快くば

見えてが窮難今宵ふ逼まども外ふども憂苦を生てその智恵を借んと欲せまで況身ふ代るふかどハ止及ぶべ死ふあらばいかでかこれ〳〵ふ今

ものこそ死資を法く父の漂沌を解くよりふも同盟の士を救ふ便点ふもあらず夏意外ふ出て歌しく又泉しさを一下しほ人を殺して人を救ふハ

素よりこれ願ひふあらまで犬塚生も如此なるべく今更ふ推辞てその意ふ従ハどそ水ふ懲て湯を辞を如く和殿をあふ狗死さしてく哀ふ盍ふ

いのぐへせんヌ沼蘭と大八が枉死ハいとく意外の殃泉傷の涙胸ふ盈て感腸を

断とハどもみな落命の致ところ。うち歎くのそせんまぐるの〳〵さぐも婦ぐ

刀を犯しく身を殺せしも狗死ちまで。ぐ家ふ相傳る破傷風の奇方

あり男女年ちは少壮のめ。鮮血各五合を取て合しくその瘡ふ注ぎ洗ハしく

死を起しく生ふ回しその瘡も亦愈ると常の塵を拂ふごとく。百度百中

愈ぎ譬ハ養由基が百歩を隔て柳葉を射つるが如し便是ぐ伯父

なり〳〵那古七郎の傳方なるぞ父ふ口授せらるるとも求めく得べき素剤

なく彼が施しかくしたるひしのミ犬塚生ハその曉よりも破傷風ふよりて命

危しその故ふ大飼生ハ武蔵の志婆浦ふ良薬ありそ試求んとく潜

ぞふ今朝しも彼処へ赴きまどぶ道遠ちまぶのまぐ還らぐ緩和殿の便

点ふ任ぶ今宵の危窮ふ脱ぐ彼人の命終らば亦何の益ふ[illegible]

沼蘭ゞ[illegible]九ゆゑのゆゑく圖まぶ男ゝ[illegible]を獲さう。不幸の中の幸、欲天欲
人欲欲ふる所只塞翁が馬ゆ似ゝう。是ハまゑ犬塚生の孝心義思世ゆ提
れゝを憐ゝ給ふ神明佛陀の冥助ゆあるべく亦何ぞや心安ゝ山林和廟と
ゝゑゝと前世ハ相殺ゝ[illegible]雙言歇今ハ舊怨氷解ゝく恩義ハ千引の石より
重ゝ功德をゝぐく口碑ゆ伝ゝく義烈の亀鑑ゆせゞらんや。ゝいかく造
逞ゝ志氣ある壯夫をゝや彼玉ハゝとも又つゞゝの癖ハゝとも見ぶ
同盟ゆ請加ゝび久後さゝゆ遇ゝうゝゝゆ親子三人ゞ共倡ゆゝゆ命を損
をゝ恨のゝゝみゝゑ賢ゆゝく且雄ゝ[illegible]大家ゝゝとも[illegible]笑ゝ。
いゝゝ[illegible]頑折ゝく數元多ゝ痛ゝゆよ嗚呼何とせんとぞゝゆ哭ゆ[illegible]む
愛哀苦浮世ゝゝや丑三の鯨音遠く響ゝ。いゞゞあハゑゝゝゆけり。

里見八犬傳第四輯卷之二終

十八